

山形大学広報誌

みどり樹

Midori  gi
Yamagata University Quarterly Magazine



特集

悠久の歴史と共に受け継がれてきた
偉大なる遺産。

**未来へつなごう、
庄内砂丘海岸林。**

研究室訪問

山田 浩久 人文学部助教授

vol.27
Spring 2006

悠久の歴史と共に受け継がれてきた偉大なる遺産。

未来へつなごう、庄内砂丘

わが国有数といわれる海岸砂丘である「庄内砂丘」。この地に暮らす人々は長い間、激しい風と飛砂に苦しんできた歴史がありました。しかし、いまの私たちが目にするのは、緑豊かに広がるクロマツ林です。これは先人たちの素晴らしい努力の賜物といえるかもしれません。

現在、山形大学農学部では中島勇喜農学部長をメインに「日本海岸林学会」を立ち上げるなど、飛砂の研究から海岸林の再生を提唱し、地域の人々とともにさまざまな活動を繰り広げています。



海岸林。



◎山形大学農学部長 中島 勇喜



庄内砂丘植林図

多くの先人たちが私財を投じた砂防林の造成

もともと庄内砂丘は、風が強く、生活の糧であった田畑をはじめ、家屋まで、砂嵐のように飛んでくる砂は容赦なく埋め尽くすといった場所でした。また江戸時代の大量輸送網は基本的に船運でした。飛砂が川に入り、川底が砂で浅くなりますので通れなくなります。そうなると今の高速道路が封鎖されたのと同じ状態になりますし、物流がうまくいかなくなる。また飛砂で川が埋まりますと、上流部が氾濫します。そんな地域性を持つ庄内において、常に必要とされたのが強い潮風や飛砂を防ぐ海岸林でした。

この植栽について特長とされるのは、民の活用です。延長約34kmの庄内砂丘は、最上川を堺とした川北地域では酒田の豪商たちがクロマツを植栽し、川南においては官である庄内藩が受け持ったのでした。特に一般的に知られているのは、本間光丘、曾根原六蔵、佐藤藤蔵でしょうか。その他たくさんの豪商たちが私財で植林しました。その代わり、豪商たちが植えて成林しますと、その土地

は豪商たちの所有になるという旨味もありました。それだけ風が強く厳しい土地であったという一方で、藩自体もお金を使わないで成林していくという大変よく考えられた仕組みでもあったわけです。

海岸線の林分条件に焦点をあてる

庄内砂丘は、江戸時代からクロマツが植えられてはきましたが、海岸線ぎりぎりに植えるという技術はなかったんです。当時は、かなり内陸側に植えていきました。汀線近くに植栽できるようになったのは、戦後です。これは法律的な財政的保障がありまして、大分整えられました。

林は風を防ぐのですが、私の長年の研究の結果、飛んでくる砂の量は、風速の3乗に比例するということがわかったんです。つまり風が2倍になりますと、飛んでくる砂の量は8倍になります。逆にいえば風速が2分の1になれば、砂の量は8分の1になります。風を減らせば砂の量は減るのです。そうしますと、海岸林はとても風を押さええます。風を押さええるということは、飛んでくる砂の量も押さええることができます。

これにはクロマツ林が適していません。ではクロマツ林がどの程度の幅を必要とし、どの程度の間隔で植えたらいいのか、つまり、その密度、厚みがテーマになってくるわけです。つまり林の林分条件ですね。高さ、幅、密度ということです。それを割り出していくわけです。たとえば、実際には500メートル幅の林があったとしても、それを研究し、実験で検証してみると、その半分でも充分の働きがあるとわかってきました。すると、効果が変わらないのであれば、残りは有効利用してもいいということになります。私自身は、もともとは飛砂から出発して、風そのものと砂の動きを研究していたのですが、少しずつ防風林へと導かれ、最近では木と風との関係に注目するようになっていきました。



悠久の歴史と共に受け継がれてきた偉大なる遺産。

未来へつなごう、庄内砂丘海岸林。



曾根原名家子十四名松植付之図(遊佐町菅里/曾根原東氏蔵)



昭和26年頃の遊佐町。家の中から砂が吹き込み住めなくなった民家。

時とともに進む 広葉樹化にも配慮

また、全国の多くの海岸林では、時間の経過とともに、クロマツだけではなく広葉樹化が進んできています。クロマツは陽樹の高木なんです。荒地で太陽がさんさんと照っているところだと育たない樹木です。昔は松葉などを拾ってたきぎにしたりしました。つまり下刈りのような効果があったわけです。しかし、現在ではまったくなくなり、松葉の腐葉土が積み重なってくるわけです。そうしますと、クロマツよりもその土壌条件を好む樹木が入ってくるようになります。そのため、クロマツが育ちにくくなるわけです。クロマツは日陰では育ちません。結局、その環境にふさわしい別の木が生長して、クロマツはだめになってしまうという現状があります。これは遷移といわれるもので、植物学的には当たり前のことなのです。だんだん栄養分が増えると、それを好む別の植物に変わっていくわけです。この付近の山でいえばブナが最終的な局面になります。ところが海岸ですと、徐々に移り変わり、最終的にはこの辺りはナラ類になります。

広葉樹化が問題なのは、秋には葉を落とし落葉してしまうこと。それに比べてマツは常緑ですからいいのですが、落葉樹ですと、

葉が落ちますので、風を防ぐ機能が低下してしまうので問題になります。ただし、自然を放置していくとこうなるのは当たり前のことですので、植栽してきた人間の側の問題にもなります。

先程話しましたように、幅や密度を厳格に調べていくことを私たちはゾーニングと言っています。実際に防風林としての機能をもつクロマツは、果たしてどの程度の幅があったらいいのかを分析し、クロマツ林で維持していく海岸側のゾーンについては、徹底的に、葉を拾ったり、広葉樹が入ってこないようにする。そのかわり、その後方では広葉樹化が進んでもしょうがないという考え方をしています。

つまり、林分条件を厳しく求めて、最小条件の幅を割り出し、そこは徹底的にクロマツを植栽し守っていくわけです。現在の私たちの研究結果では、庄内のクロマツ砂防林の幅は250メートルというデータを出しています。その結果、クロマツ林の後方は広葉樹化しています。しかし、海岸地域の生態系を守る意味では、実がなる広葉樹が入ってきた方が、動物が増えます。クロマツ林は単純な林ですので動物は少ないんです。ですから広葉樹化は悪いことだけではないのです。

地域の人々共に 海岸林の再生をはかる

さらにこの海岸林を保存し守ることに焦点を当ててみましょう。現実的には、庄内砂丘においては、いろいろなボランティア団体が立ち上がっています。NPOも動き出しましたし、小・中学校での総合学習の場として取り上げる場合も多いですね。そういう方たちと共に「羽根庄内公益の森づくりを考える会」を運営しています。この庄内の海岸林を将来的にどのようにしていこうかという未来の庄内砂丘を考える会です。しかし、ボランティアがいろんな形で立ち上がっても、実際にどのように手入れをしたらいいのか具体的にはわからないと困るわけです。そういうときに、先程のゾーニングが参考になるわけです。「ここはクロマツでいきましょう、ここは広葉樹で」という指針を与えないとボランティアの活動としてもどういう手入れをしたらいいかがわからないからなのです。

マツノザイセンチュウ病によるマツ枯れも問題です。秋田県では、ほぼ全滅状態ですね。全国でもすごい勢いで繁殖しています。それから庄内浜で問題視されていますのは、土地開発。砂取り業者によって、どんどん砂丘が削られています。そうすると、そこにある木はもちろん駄目になります。



砂丘林ボランティア活動。さまざまな保全活動が行われています。



整備され美しく輝くクロマツ林(遊佐町日向川上空)

海岸地帯で起こる飛砂、潮風、津波などは全部移動現象です。つまり、物理的に解明すべき現象です。海岸林は生き物なのです。物理的な移動現象を土木的な人工構造物で防ぐのではなく、生物に担わせている、それが海岸林なのです。植物なのできちんと手を入れていかないと、生物は生物の生き方で勝手に成育をしていくようになります。それが遷移なんです。そうすると、海岸林としての防災機能が失われていくのは当たり前なんです。生物にそういう機能を担わせておいて、手を入れないというのは、あまりにも虫が良すぎると思います。植え付けたのが人間なら、最後まで責任を人間が持つべきなんです。クロマツは200年ぐらい生きますね。いま海岸にあるのは戦後に植えられた約60～100年の年輪を刻んだクロマツが多いです。それが最前線のクロマツです。適当なときに適当に手を入れないと、もやしみたいな細い木になるんです。結局、林内が暗くなってしまい、横に太れなくなるんです。しっかりした頑丈な木にするためには、間伐したり、下刈りしたりする手入れが必要です。海岸林と私たちの間に、「守り、守られる関係」を造っていくことが大切だと思います。

海岸林の抱えている問題の多くの根源には「維持管理不足」が大きく横たわっています。この維持管理をどうするのがク

ロマツ林の再生につながると考えています。そのためには、行政、そして地元ボランティアやNPOで参加する方々の協力を得ながら防砂林を守っていく。そして少しずつですが、啓蒙を進めることによって、もっとたくさん地域の方が参加してくれるのではと考えております。

海岸林に親しみ、 海岸林に学び海岸林を 守ろう

この庄内の気風でしょうか。海岸林は地域全体レベルで管理しようという流れがあります。ここには、風を防いでくれているという祖先からの実体験があるので、この流れが盛んです。行政も一生懸命取り組んでいます。全国的に見てもこの地域を巻き込んでの取り組みの流れは突出していますね。私自身は全国海岸林学会の会長も務めていて、いろんな場所で保護を訴えています。ほかの地域にはない動きがあってうれしく思っています。県をはじめ、地域で皆さんをまとめていくキーマン的な人もここにはいます。多くの地域は、やはり行政だけが続けてきたところが多いんです。庄内は、歴史的にも豪商というあくまでも民が主体になってやってきたという土壌があり、より公益に結びつくような土台があります。それは全国でもほとんど例があ

りません。

世界的に見回しても、一昨年インド洋で津波が起こり、約30万人の方がなくなりました。今あの津波を契機にして、海岸林を見直そうという動きが大きくなっています。8月にはスリランカで海岸林の津浪災害防止効果について調査しました。また、韓国とも10月に合同で学会を開きました。日本は海岸林について、世界的に見ても先駆者なんです。もちろんそれだけの被害を受けてきたという歴史があると同時に、そこに目をむけるだけの余裕があるのも事実です。たとえば内戦状態にある国においては海岸に木を植えるなんてできないわけですから。

34キロ続いた庄内砂丘、そしてそれを覆う海岸林、一連でこれだけ続いている海岸林なんて、世界でもとても希有なものです。それは三保の松原や虹ノ松原等の有名な海岸林と比べても決してひけをとるものではありません。ただ庄内砂丘は風が強くて、砂が飛んでくる場所では、木は何十年たっても大きく成長できない。自然が厳しいんですね。しかし延長34kmという長さ、そして民が手がけ、現在もそこに生きる人々たちが手を差し伸べて、官とともに防砂林を一緒に守ろうとしていること。そういう総合的なものから考えますと、この庄内砂丘林は世界に誇れるものだと思えますね。

人文学部

パネルディスカッション

「わかりやすい授業とはなにか？ 授業のわかりやすさとは？」



授業評価アンケートには、一体どのような効果があるのか、疑問を抱いているのは学生諸君だけではないでしょう。この問題について、教員と学生が率直に意見を交換するために、人文学部では12月14日にシンポジウムを開催しました。テーマは、アンケート項目の中でも必ずしも共通の理解が得られていない、「授業の分かりやすさ」です。

学生から寄せられた授業への期待と評価、教員からの、授業の意図と理解への工夫に関する発言を踏まえて、フ

ロアからも大学の講義とは何かを問う真摯な意見が出されました。そこで示された学生諸君の希望は、決して図式的な理解の容易さではありません。むしろ、学生諸君の知への真剣な欲求を感じ取ることができたことが、今回の企画の最大の収穫でした。同時に望まれているのは、「伝えようとするちょっとした工夫」です。この種の要望は、すぐ改善につながるものですから、授業時間においても日常的に要望が出されることを期待しています。

地域教育文化学部

臨床心理士指定校記念式典
並びに記念講演会の開催



大学院教育学研究科学校教育専攻臨床心理学分野が、昨年3月31日付けで日本臨床心理士資格認定協会より指定大学院(1種)の指定を受けました。また「心理教育相談室」が松波地区に拡充移転し、平成17年10月から有料化による相談業務が開始され、山形県における「臨床心理士」養成の第一歩を踏み出すことになりました。このことによる記念式典並びに記念講演会が、平成17年11月23日山形市霞城セントラル15階のサテライトオフィスにおいて開催されました。

記念式典では、仙道学長から臨床心理士指定校の意義と大学の役割について挨拶があり、続いて、来賓の方々から祝辞をいただきました。その後、大学院臨床心理学分野や心理教育相談室についての概要説明があり、記念式典は終了しました。引き続き、記念講演として、新潟心理相談システム代表であり、日本臨床心理士資格認定協会理事でもある佐藤忠司氏による「臨床心理士に何ができるか」の講演があり、盛会のうちに終了しました。

理学部

「2005数学エッセイ・コンテスト」を開催



数理科学科では、教授であった内田伏一氏が寄附された奨学寄附金を基金に、昨年「2005数学エッセイ・コンテスト」を開催し、10月に審査結果を発表しました。公募対象は6000字程度のエッセイで、論文、批評文のコンテストではなく、あくまでも応募者自身の経験と思想を記すことを求めました。その結果、71編もの応募があり、投稿者の住所は北海道から九州、外国のインドネシアにまで及び、年齢も10代から80代の幅広い層に及びました。また、教員、

塾講師、技術者、主婦、学生など、多種多様な方が応募されました。選考の結果、「あるエンジニアの半生—数理の軌跡」と題した山口県在住の会社員の方の作品が最優秀作となり、奨励金10万円が贈呈されました。

最優秀作品と4点の優秀作品はいずれも「数学と社会」の関係を鮮やかに描いており、数学の研究・教育に携わる数理科学科教員にとっていずれも刺激的な作品でした。次回のコンテストは2007年に実施する予定です。



医学部

「臨床実習開始前の共用試験」の実施



山形大学医学部では、平成17年12月に「臨床実習開始前の共用試験」を実施しました。この試験は、医学部学生が患者さんと直接対応しうる知識、技術、倫理観が学習されているか学生の能力と適正について一定水準を確保するために実施される全国共通の標準評価試験で、「コンピューターを用いた客観的試験CBT(Computer Based Testing)」と患者に接する態度・能力を試す「客観的臨床能力試験OSCE(Objective Structured Clinical

Examination)」から構成されるものです。これまで3年間の試行を経て、本年度が第1回目の正式実施となります。

山形大学医学部においては、新カリキュラムによる日本一長い臨床実習が第4学年の1月から始まること、この共用試験をパスしなければ、臨床実習に進めないとしていることから、平成17年12月2日に実施したCBTは全国で最初の実施となりました。

現在は、これらの試験にパスした4年生が、臨床実習に取り組んでいます。

工学部

工学部講義棟の改修決定

—夢ある工学教育ゾーンの設立へ—



◆米沢キャンパス整備計画図◆

工学部では次世代を担う高度工学技術者を生み出すため、講義室等を集中化し教育環境の充実を目指した「工学教育ゾーン」の整備を計画しています。

この度、その中心となる4号館の改修が平成17年度補正予算で決定しました。

この建物は昭和43年に建設され、物理実験室、化学実験室、大講義室などとして活用してきましたが、改修後はJABEE(日本技術者教育認定機構)の認証基準を十分に満たす最新の工

学教育を実践する場として、4928㎡の面積を有する建物が平成18年度中に完成します。

新講義棟は、全館冷暖房完備でゆとりある快適な最新の講義棟として、先端機器を完備したゼミ室や明るく快適な講義室、ゆとりの学生ホールなどを備え平成19年4月から使用可能となります。

世界に誇る最先端研究及びきめ細やかな工学教育を実践している工学部の活躍に今後ともご期待ください。

農学部

生物生産学科「学外農業体験実習」



「学外農業体験実習」は生物生産学の導入教育として開講されました。農家に宿泊して農家と生活をともにし、農業の現場で一緒に働き、話を聞く中から農業に対する問題意識を持ってもらうことを目指しております。

参加学生42人は15軒の鶴岡市認定農業者会の協力農家に分宿、8月14日から7泊8日の実習に汗を流しました。この時期は丁度、在来枝豆「ダダチャマメ」の収穫最盛期にあたり、主に枝豆の収穫、脱穀、選別、袋詰、出荷の

過程に参加させてもらいました。学生のレポートからは、作業の身体的厳しさを味わいながら農家は農業を営んでいるのだということを知り、経営として成り立たせるためには働くだけではなく技術と知識が必要であることを実感し、家族経営は人間の生活の望ましいあり方の一つとしながらも、増え続ける世界の人口を家族経営では養えないのではないかと考えるなど、農学の課題について考えるきっかけになったことが窺えます。

地理情報システムGISの可能性を広げる

山田 浩久 人文学部助教授

研究室
訪問

昔の地図から今を検証したり、
今のデータから未来を予測したり。
地図を媒介として深まる地域との連携。

一般的に地図というと目的地にたどり着くために必要な町や建物の位置関係を示す情報と考えがちだが、実は地図の本質はもっともっと奥が深い。地図と一口に言っても道路地図やハザードマップ、環境マップなど、その視点や目的によってさまざまに描き出される。そんな地図を多角的に描き出すことによって社会貢献や地域研究に取り組んでいるのが人文学部人間文化学科の山田浩久先生。各方面からのニーズに応えるカタチで地理情報システムGISの開発にも深く関わっている。



近世以降の山形市市街地の形成過程をGISを用いて紹介した事例。

都市地理学を専門とする山田先生は兵庫県生まれ。山形大学に赴任してきて9年目、その前には女子大で研究と教育にあっていた。ずっと大都市圏を題材とした経済地理学や地価の変動予測などを専門としてきたが、山形に来てからはちょっと勝手が違った。それまで当然と考えられていた理論が地方都市にはあてはまらないという現実。そのため研究の手法に大きな変化が生まれた。対象となるエリアの情報がデジタルデータ化されていないため現場主義にならざるを得なくなったのだ。大都市圏ではパソコンに向かっていれば出来た仕事が、ここでは現地に向いて対話の中からさまざまなことを見出していかなければならない。でも、それが山田先生にとってはとても新鮮で、とてもいい経験になったという。もし、あのまま大都市圏だけを視野に研究をしていたらコンピュータの世界だけで終わっていたかもしれない。外に出る機会がグンと増えたという山田先生が、現地調査に学生たちを同行させて感じるの、学生たちの真面目さと口数の少なさだという。現地に行っても地元の人と馴染むまでに時間がかかり、帰る間ぎわになってようやくうち解けてくるのだという。ちょっともったいない。せっかくの真面目さを生かすためにもあと一歩踏み込んで・・・と根っからの関西人である山田先生は少し歯がゆさを覚えながらもメールを送っている。

現地調査や学生たちとの交流を通して地域との密着度が高まる中で、山田先生が新たな興味の対象として注目したのが、城下町時代の山形の地図。そこから当時の人々のさまざまな考え方が見てとれるからだ。山形城が扇状地扇端部に築城された理由は、馬見ヶ崎川を自然の要害として利用し、その水を内堀や外堀に引き込むことを想定していたためであり、扇端部であれば湧水の利用や井戸の掘削も容易だったからだろうと推測される。さらに、千歳山や盃山といった自然の

地形と城下町を形成する武家地や町人地といった配置にもある種の規則性を見てとれるという。今では高層の建築物に阻まれて望むことが出来ない城下町時代の景観を3Dで再現してみても、当時の人々はこんな景観を眺めていたのかと思いを馳せたりもする。これこそがまさに、「人や物がその場所に存在している、または、存在していた理由を考え、その理由から地域の特徴を説明する科学」という地理学そのもの、つまり原点回帰である。

地図も紙からデジタルへ。期待と注目を集めるGIS、各方面のニーズに対応。

今、山田先生がもっとも力を注いでいるのがGISを普及させるためのさまざまな活動である。各種セミナーなどでその必要性や有効性について講演したり、GIS構築のテーマに沿ったベースマップのデジタル化などに精力的に取り組んでいる。GISをより理解しやすいようにと、山田先生はこんな例え話を用意してくれた。県内に多数の店舗展開をしているスーパーが、それぞれの店舗の場所を示す地図上にその日のお買い得情報を合わせて表示するなどのサービスを可能にするのがGISだと。もちろん、環境マップやハザードマップ、防犯マップなど公共性の高い分野での期待も大きい。このように市民生活にさまざまなカタチで活用できるということで、行政やビジネス、各方面で着々と実用化が進んでいる。それに伴って山田先生のもとに寄せられる相談や要請も多種多方面にわたり、多忙な日々を送っておられるようだ。

地図という平面を飛び出して人々の暮らしの中で立体的に活躍し始めているGISを通して、地理学という私たちのあざかり知らなかった学問が、少し身近に感じられるようになった気がする。現在、過去、そして未来



予測まで、地図は私たちに実にさまざまなことを語りかけている。

※GISとは、地理情報システム (Geographic Information Systems) の略で、コンピュータ上の地図とさまざまな情報をリンクさせることで、位置や場所だけではなく、知りたい情報を瞬時に提供するシステム。





研究成果

アンティーク着物 円阿弥
スタッフ 高嶋奈緒美 (旧姓 樋口)
教育学部生涯教育課程卒業(平成17年3月)



大学では、生涯教育課程生涯教育コースを専攻した高嶋奈緒美さん。学舎では幅が広い分野を学んだが、特に卒業した現在も印象が残る授業は、研究室主催による美術展の企画・運営体験だったとか。いまでも、よく美術館に足を運ぶという彼女が、アンティーク着物に興味をもったのは、西洋美術史のジャポニズムを学習したことに起因する。

「いまの若い人たちが昔のきもの色や柄を見て、『何、これ!?!』ってときめくのは、きっとジャポニズムに出会った外国人も同じ気持ちだったのかもしれないね」と、きらきらした眼を輝かせて語る。

大学2年からアンティーク着物を扱うこの店で展示会のたびに手伝うようになり、ますますアンティーク着物にのめり込んだ。

「何回見てもあきないんですよ。きれいだなあ、いいなあ

学生時代に育んだチャレンジ精神。
あなたも、夢の種を飛ばしてみませんか。

って。そのうち自分で着物を着るようになって、新しい自分を発見するような気がして…。そういう楽しみをいろんな人に体験していただきたいですね」

いままであまり夢をもたなかった奈緒美さんが、卒業後、この店に就職したことで、自分でアンティーク着物屋をもつという目標をもつようになった。ちょっと着物を着てみたいという若い人が、おこづかいで買えるアンティーク着物。だからこそ気軽に着ることができるし、着物を通して、いろんな人と喜びをわかちあえるからだ。

「大学時代だからこそ、いろんなことにチャレンジすることが大切だと思いますね。私も小さな挑戦から、かけがえない自分の夢を見つけました」

この山形で育んだ夢の種。さて、真摯な眼差しは、これからどんな芽吹く季節を迎えるのだろうか。



成

山形大学で学んだこと、過ごした日々、それらはさまざまな成果となって山大的歩みに燦々と火を灯し続けています。現役の学生やOBたちの活躍する姿を通して、そこに花開いた成果のかずかずに拍手を送り、新たな成果への糧とするものです。



創 作 の 成 果

大平 佳澄
人文学部人間文化学科2年

読むこと書くこと、そして歴史が好き。 最年少で「北の文学」を受賞しました。

一昨年、岩手日報社の公募文芸誌「北の文学」48号の優秀作を最年少で受賞したという女子学生を小白川キャンパスに訪ねた。目の前に現れたその人、大平佳澄（おおだいらかすみ）さんは文学少女のイメージそのままに穏やかで物静かな女性だった。受賞作の「ふることのふみ」は古事記をモチーフとしたもので、歴史や古典に興味があるという大平さんならではの作品。大平さんが岩手日報社の地元、盛岡市出身ということもあって若き才能の誕生として大いに期待を集めている。その後も同誌に寄稿したり、大学で所属している文芸部の同人誌に作品を発表したりと執筆活動は順調のようだ。

好きな作家は、坂口安吾と京極夏彦。独特の世界観がお好みようだ。ほかにもいろいろな作品

を読んでは自分ならこうするなどと思い巡らす。もちろん、つねに机や本に向かってばかりいるわけではない。同じ文芸部の友達と遊ぶことも大好きだという。特に理系の人との話はとてもいい刺激になって楽しいと。さまざまな出会いや経験が蓄積されて自分の中で昇華され、それが作品となって出てくると信じている大平さんは、いろいろなことに挑戦してみたいと考えている。いきなりプロ作家は無理でもいずれは・・・とじっくり時を待つ構え。今のところは出版社や図書館など、歴史や文学に関われる職場への就職を希望している。おっとりしているように見えてシンはしっかり、そして意外に勝ち気な一面も。二人の弟を持つ長女と聞くとなんとなくうなずける。



果

山形大学のキャンパスがある街を訪ねる「シリーズ街角」の第四回は、鶴岡市。街のそこかしこに城下町時代の風情が薫る同市には山形大学農学部のカンパスがあります。海あり、山あり、平野ありの豊かな自然環境を背景に研究成果を上げ、学生たちの伸びやかな学びの地となっているようです。そんな学生たちの憩いの場ともなり得る鶴岡の名所を訪ねてみました。

藤沢作品のふるさととして
脚光を浴びる旬の街をそぞろ歩く。



昨年の市町村合併により新たなスタートを切った鶴岡市。その面積の大きさもさることながら歴史的、文化的な意義はもっと大きいに違いない。折しも、鶴岡出身の作家・藤沢周平の作品が相次いで映画化されるなど、何かと話題に事欠かない鶴岡市はまさに今が旬の街。充実したキャンパスライフの折々に訪ねてみたい名所や旧跡のなんと多いことか。街中にあって観光スポットとしてももっともポピュラーな「致道博物館」は、江戸時代や明治時代の立派な建造物を一堂に集めた疑似タイムスリップゾーン。その近くには桜の名所として知られる「鶴岡公園」や「藩校致道館」なども点在しており、ゆったりとしたひとときを過ごすにはうってつけの街並みである。さらに、金峰山方面に足を伸ば

せば「藤沢周平生誕の地碑」があるほか、城下町の風情が残る藤沢作品ゆかりの地18カ所には案内板が設置されているという。

鶴岡の街中を少し離れて羽黒町を訪れると、藤沢映画のロケ地として話題となった「松ヶ岡開墾記念館」や国宝「羽黒山・五重塔」があり、さまざまな意味で歴史の重厚さを肌で感じることができる。もちろん、アカデミックなスポットばかりではない。もっと気軽に楽しんだり、癒されたいという向きには、「加茂水族館・クラネタリウム」もある。ゆらゆらと海に漂うクラゲはいまや究極のいやし系。鶴岡市は、学生たちに格好の学びと癒しに満ちている。

この街
いちおしの
味



【孟宗汁】

採れたての孟宗を酒粕と味噌で仕立てた孟宗汁は、雪国に春の訪れを告げる風物詩の一つ。その柔らかな歯ごたえと独特の甘みと香りが食欲をそそります。

仁済大学校人文社会科学大学 朴学長ほか2名が来学

去る2月1日(水)からの3日間、昨年8月24日付けで国際交流協定を締結した大韓民国 仁済(インジェ)大学校人文社会科学大学 パク・ソプ学長、ジョン・ソノヨブ副学長及びピョン・ハクス教務課次長の3名が本学を表敬訪問しました。

初日の夕方には、パク学長ら一行は、学長室において仙道学長、遠藤理事及び石島理事らと親しく懇談し、その後、大学及び地域教育文化学部の関係者による夕食会に臨みました。

2日目は、地域教育文化学部の学部長室において学部長、副学部長、学科長及び国際交流関係委員らとそれぞれの大学の情報などを伝えながら、相互交流の意義等について話し合いました。

また、同日の午後には、小白川キャンパス内の施設を視察し、その後、本学部1号館A4講義室において「東アジアの協力を考える」と題して、パク学長による1時間程の講演会が行われ、教職員及び学生ら

約80名が、日本への留学経験があるパク学長の流暢な日本語での講演に聴き入りました。

終了後、会場を移動して、約30名の教職員及び学生との意見交換会が行われ、学生の相互交流(留学)に当たっての受け入れ体制(カリキュラム、修学等のサポート、ドミトリー等)、治安、物価、交通アクセス等、留学する際の貴重な情報を得ることができ、とても有益な意見交換会となりました。

さらに、夕方からは、山形市内のホテルにおいて地域教育文化学部主催の歓迎

レセプションが行われ、教職員との賑やかな国際交流となりました。

なお、本年4月には、仁済大学校人文社会科学大学から、早速2名の留学生を受け入れることになっており、今後、国際交流の輪がますます広がるものと期待しています。



YAMADAI NEWS

OH, ONE! ? 学長賞を受賞



OH, ONE!?(山形大学生協学生委員会)は、学生と大学と生協の橋渡しを行うボランティア団体として20年以上前から活動してきました。最近の主な活動は、オープンキャンパス、一般選抜試験等において早朝から山形駅にて新幹線やバス乗り場までの乗車案内、受験生を試験会場まで誘導、更に一般選抜試験当日には、山形空港及び東京駅からの案内を行っております。

受験生の不安や疑問への相談、キャンパスまでの道案内など、受験生の不安を少しでも和らげるよう受験生の立場に立

った対応と受験生や父母からも感謝の念が寄せられるなど高い評価を得たことが受賞につながったものです。

受験生として恩恵にあずかり、山形大学に入学してからメンバーに加わった学生諸君も多いようです。メンバーは134名で、山形地区、米沢地区、鶴岡地区で活動しております。

受賞の喜びを代表の榊原さんと杉山さんは次のように語ってくれました。「先輩方の活動の積み重ねが多くの人に認められたものだと思います。現メンバーも先輩

の意志を引き継ぎ、助け合い、協力して活動しています。これまで行ってきた自分たちの活動に誇りをもって、受験生や新入生、山形大生のために活動を継続していきます。」

OH, ONE! ?が山形大学を元気にしてくれる源として、山形大学の充実・発展に今後も大いに寄与されることを期待します。



セミナーの開催

積極的に就職支援事業を展開

1. テレビ会議システムによる企業セミナーを実施



平成18年1月25日、東京サテライトと小白川キャンパスをつなぎ、2007年春卒業予定の学生を対象とした企業セミナーをテレビ会議システムを利用して実施しました。

東京サテライトには製菓業界の人事担当者が、就職課には約40名のリクルート姿の学生が集合し、システムを介して情報交換を行いました。

テレビ会議システムを活用した企業セミナーは他に例がなく、まさに画期的な試みと言えます。参加した学生からは、「東京に行かないと聞くことが出来ない話を大学で聞くことができ、経費面でも大変助かりました」などの声がありました。

2. 山形大学単独の合同企業説明会を開催



山形大学単独の合同企業説明会を2月12日(日)に山形国際ホテルを会場にして開催しました。県内外72社の企業の協力を得、約300名の学生が参加しました。

ロビーに特設会場として「就職相談」「合同企業説明会の活用方法」「内定者パネルディスカッション」「学生による就職相談」など各種イベントコーナーを設け、学生を応援しました。

山形大学東京にてOBセミナーを開催



山形大学東京サテライトを会場にして「山形大学OBセミナー」を開催しました。東京近郊の卒業生を対象としたセミナーで、各学部同窓会の枠を超えて東京で初めて行われました。

講演会終了後は、交流会を行い、参加した卒業生らは東京近郊で暮らす仲間たちとの再会や新たな交流に沸き、今後もこのような会が行われることを望む声が多数聞かれました。交流会では各同窓会の代表者等からのサポーターメッセージもあり、卒業生と山形大学の今後のより一層の発展を願いました。

開催日 平成18年2月4日(土)
講師 山本陽史 明海大学教授(元山形大学教育学部助教)
演題 「藤沢周平の山形」

公開講座等

人文学部

演劇論

—学問の横丁を抜けるとそこは舞台だった—

芝居には人の関心をだだ引くだけでなく、何か異次元空間に私たちを引き込み、俗世の悩みや煩わしさによって硬直化していた精神をリフレッシュさせるような独特な効果があります。本講座の講師陣は、演劇論の専門家ではありませんが、自らの専門とかかわらせながら、狂言、ギリシャ悲劇、中国演劇、日本の現代劇などについて熱く語ってもらいます。

日時 平成18年6月20日(火)～7月7日(金)
18:30～20:10 火・金曜日 計6回

場所 山形市 人文学部講義室
募集人員 30人 一般の方、大学生、高校生

受講料 2,000円(大学生、高校生は無料)

問い合わせ先 人文学部総務係 TEL023-628-4203

地域教育文化学部

人口減社会の学校教育を考える

—21世紀の教師像を求めて—



超少子高齢型の人口減社会に突入した現在の日本では、増大的人口構造を基調としてきた近代学校教育が根底から問い直されています。

新生の地域教育文化学部は、地域社会と緊密に連携しながら、発達臨床学や特別支援教育、そして食育学やスポーツ社会学など、今大きく発展しつつある新分野を中心に、21世紀の教師像を切り開こうとしています。

日時 平成18年6月9日(金)～7月14日(金)
18:30～20:30 毎週金曜日 6日間

場所 山形市 地域教育文化学部1号館3階共通14演習室
募集人員 30人 一般の方

受講料 3,000円

問い合わせ先 地域教育文化学部総務係 TEL023-628-4304

理学部

親子で化学実験 化学反応はエネルギー

主な内容は次のとおりです。

- ・振ると色が変わる不思議なボトル ・携帯カイロを作ろう
- ・携帯カイロと同じ材料で電池ができる ・光るものを探そう
- ・ケミカルライトの仕組み ・ELを使ったポップアート など。

日時 平成18年4月9日(日)
午前の部(10:00～12:00)・午後の部(13:30～15:30)

場所 山形市 理学部物質生命化学科学生実験室
募集人員 親子(小学4～6年生) 午前・午後の部 各10組

受講料 無料

問い合わせ先 理学部総務係 TEL023-628-4505



平成18年3月から6月まで



午後のサイエンス

次の5つのテーマで開催します。

- ・符号理論入門ーデジタルの数学ー
- ・気象現象における物理学
- ・今、アモルファスが面白い!
- ・受精の神秘
- ・「黄砂」を春の風物詩とよんで良いのだろうか?

日 時 第1回 平成18年6月17日(土) 13:00~
第2回 平成18年6月24日(土) 13:00~
場 所 山形市 理学部先端科学実験棟大講義室
募 集 人 員 100人 一般の方・大学生・高校生
受 講 料 2,000円(高校生は500円)
問 い 合 せ 先 理学部総務係 TEL023-628-4505



理学部が地域の未来のための科学を考え地域に向け実施する事業活動の愛称・ロゴを制作しました。
「SCITA(サイタ)ーScience for Tomorrow in our Area」

人文学部・地域教育文化学部・理学部

小白川キャンパス トワイライト開放講座(前期開講分)

	人文学部	地域教育文化学部	理学部
日 時	平成18年4月~平成18年8月		
	毎週木曜日	毎週 月・火・水曜日	毎週金曜日
	16:30~18:00		
場 所	人文学部	地域教育文化学部	理学部
募集対象	高校生 (理学部は一般の方にも開放しています)		
受講料	無 料		
問い合わせ先	学務部教務課理学部担当係 TEL.023-628-4508		
その他	詳しい講義内容は、各学部HP等をご覧ください。 講義開始日、休講日等にもご注意ください。		

医学部

平成17年度高畠げんき健診記念事業
山形大学医学部21世紀COEプログラム
「地域特性を生かした分子疫学研究」
高畠げんき講演会
ー健康寿命の延伸を目指してー

日 時 平成18年3月19日(日) 13:30~15:30
場 所 高畠町 健康管理施設 げんき館
入 場 料 無料
問 い 合 せ 先 医学部高畠疾患予防センター
TEL0238-52-5331
高畠町健康福祉課健康推進室
TEL0238-52-5045

工学部

グリーンケミストリー

ー持続的発展を可能とする身近な製品の化学技術ー

21世紀は、環境と調和した快適で健康的な生活を維持・発展することが求められている世紀です。グリーンケミストリーとは、環境に配慮した化学を基本とし、「製品や製法の開発、使用、廃棄、リサイクルまでのすべてを考え、人と生態系の健康への悪影響を低減する経済的で合理的な化学技術」です。本講座では、環境に優しいものづくりであるグリーンケミストリーの最前線について分かりやすく解説いたします。

日 時 平成18年4月15日(土) 10:00~15:00
平成18年8月5日(土) 10:00~15:00
場 所 米沢市 工学部
募 集 人 員 50人 一般の方・大学生・高校生
受 講 料 無料(ただし、テキスト代の実費をいただきます)
問 い 合 せ 先 工学部研究支援係 TEL0238-26-3004

農学部

新奥の細道 ー赤川流域を科学するー

赤川は豪雪地帯である朝日山地や月山、湯殿山からの豊かな水を集め、山形県庄内地方の南半分を流れて日本海に注ぐ、県内第二の大川です。この赤川に沿って、奥山、里山、市街地、耕地、海岸、それぞれの地域で、私たちの先祖は信仰や生活のなかで自然と関わりながら豊かな地域文化を育んできました。本講座では、芭蕉のように過客となって、赤川流域をいろんな視点から再発見するための旅に出てみようと思います。

日 時 平成18年6月10日(土)~7月1日(土)
13:30~毎週土曜日 4日間
場 所 鶴岡市 農学部103講義室
募 集 人 員 50人 一般の方
受 講 料 2,000円
問 い 合 せ 先 農学部庶務係 TEL0235-28-2805

式典行事

平成18年度 山形大学入学式

日 時 平成18年4月7日(金) 10時~
場 所 山形市 山形県体育館

農学部附属演習林入山式

日 時 平成18年5月6日(土)
場 所 鶴岡市 農学部附属演習林

※大正5年5月6日に祠を建立し入山者の安全を祈願したのが始まりです。

山 大
博 物 館山形大学附属博物館の収蔵品をはじめ、
大学が誇る貴重な資料を紹介いたします。

シリーズ ④

この水彩画を描いたラゲータ玉は工部美術学校(日本で最初の官設美術学校)の彫刻担当教授であったヴィンツェンツォ・ラゲータの妻として知られている。少女時代のラゲータとの出会い、彼の故郷であるパレルモへの移住、結婚、数々の国際展での受賞、そして約50年ぶりの日本への帰国。彼女の数奇な人生は大変興味深いものです。二人の出会いは庭で草木を描いていた玉をたまたま通りがかったラゲータが見かけたのがきっかけでした。ラゲータは玉の絵を褒め、紙と鉛筆を借りて自分の顔を描いて見せます。玉は当時すでに日本画家に指示し、その多くの弟子の中でも認められた存在でした。しかし粉本模写という日本独特の美術指導法のもとで絵を描いていた玉は、ラゲータが描いてみせた遠近

法と明暗によって本物そっくりに表現する西洋画法に戸惑いながらも惹かれていくのです。

《あざみ》が描かれた時期は定かではありませんが、おそらく彼女が日本に帰国した1933年～39年頃に描かれたものでしょう。左下を見ると玉のイタリア名であるエレオノーラ・ラゲータとサインがあります。帰国後の玉はアトリエで終日制作に励みましたが、よく描いたのが季節ごとの美しい花でした。玉はイタリアに渡る前から相当な写実の技量を持っていましたが、渡伊後はそれに加えて造形的な技術が感じられます。さらに《あざみ》は同時期に描かれたと思われる水彩の作品群と比べても構図、筆遣いの軽やかさ、共に優れており、玉の水彩画の中でも良品といえるでしょう。

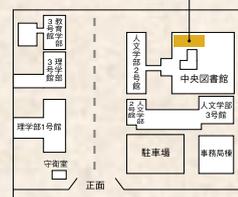
ラゲータ玉 《あざみ》

サイズ:24×27cm (色紙・水彩)



附属図書館及び附属博物館は学外の方もご利用いただけるように開放しております。利用方法等は図書館カウンターにお申し出下さい。
知的宝物がいっぱいの附属図書館・博物館に是非お越し下さい。

山大博物館



編 集 後 記 Editor's Note

「みどり樹」は、今年度から新たな編集体制になり、山形大学の学内外におけるさまざまな活動をお知らせすることを目指して、誌面作りをしました。地域情報や、卒業生と在学生の活躍を紹介するコーナーを設けるなど、新たな試みも行いながら、ようやく今年度最後の第27号の発行となりました。この1年間、取材にご協力いただいた多くの皆様に心より御礼申し上げます。

国立大学法人化以後、大学活性化のため多くの新規事業が始められ、従来の事業についても更なる改革が進められています。しかし、それらの新規事業や改革が実際に効果をあげているのかについては、これから厳しく検証することが必要だと思います。その意味で、刷新された「みどり樹」が、本当に皆様の心に届くものとなっているか、つねに問い直しながら編集にあたりたいと考えています。どうか、今後も本誌についての率直なご意見をお聞かせくださいますように、お願い申し上げます。

広報委員会委員 玉手 英利

表紙の
ことば

飛砂の研究を日々行う中島研究室。風洞を使って、学生とともに飛砂防止柵の堆砂状況を計測中。このように、手間と時間をかけた地道な研究から庄内海岸のクロマツ林は守られている。

- この「みどり樹」は下記URLからもご覧になれます。
<http://www.yamagata-u.ac.jp/html/kouhoushi.html>
- 「みどり樹」に対するご意見・ご質問等をお気軽にお寄せください。
E-mail:sombun@jn.kj-yamagata-u.ac.jp
- 「みどり樹」は、3月、6月、9月、12月に発行する予定です。

—— 地域に根ざし、世界を目指す ——
山形大学
Yamagata University

山形大学ホームページ <http://www.yamagata-u.ac.jp/index-j.html>